



76
4059





新平



大垣市の天陽橋とひら
 依然岸田市兵三万高迄十年
 八月の赤毛赤と零の大倫決の神金
 五田を借りて切催促として
 返すのあへ手なるお合が
 山縣の地券状を取出し
 金の都合のまゝ本日まで
 極めて秋りと日切小
 岸田の女房おのり
 金ろけ取お行て
 足も大切の
 地券状を



お下
 ちえ 女房
 地券と書状
 九の女房の小書状
 地券状をわけて
 客の中へ心に昨日の
 とくくふて心から

お下
 ちえ 女房
 地券と書状
 九の女房の小書状
 地券状をわけて
 客の中へ心に昨日の
 とくくふて心から

お下
 ちえ 女房
 地券と書状
 九の女房の小書状
 地券状をわけて
 客の中へ心に昨日の
 とくくふて心から

お下
 ちえ 女房
 地券と書状
 九の女房の小書状
 地券状をわけて
 客の中へ心に昨日の
 とくくふて心から

お下
 ちえ 女房
 地券と書状
 九の女房の小書状
 地券状をわけて
 客の中へ心に昨日の
 とくくふて心から

これに金作の
 奥もまて
 昔もあとも
 債とと
 不法の



此男をん計らけと
 おくくて度なる
 屋の女房のと人書
 まり

これに金作の
 奥もまて
 昔もあとも
 債とと
 不法の

これに金作の
 奥もまて
 昔もあとも
 債とと
 不法の





内津かりこころはあつたまを

おまへもあつたまを
おまへもあつたまを

おまへもあつたまを
おまへもあつたまを

御力で力をかけて

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを



御力で力をかけて

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

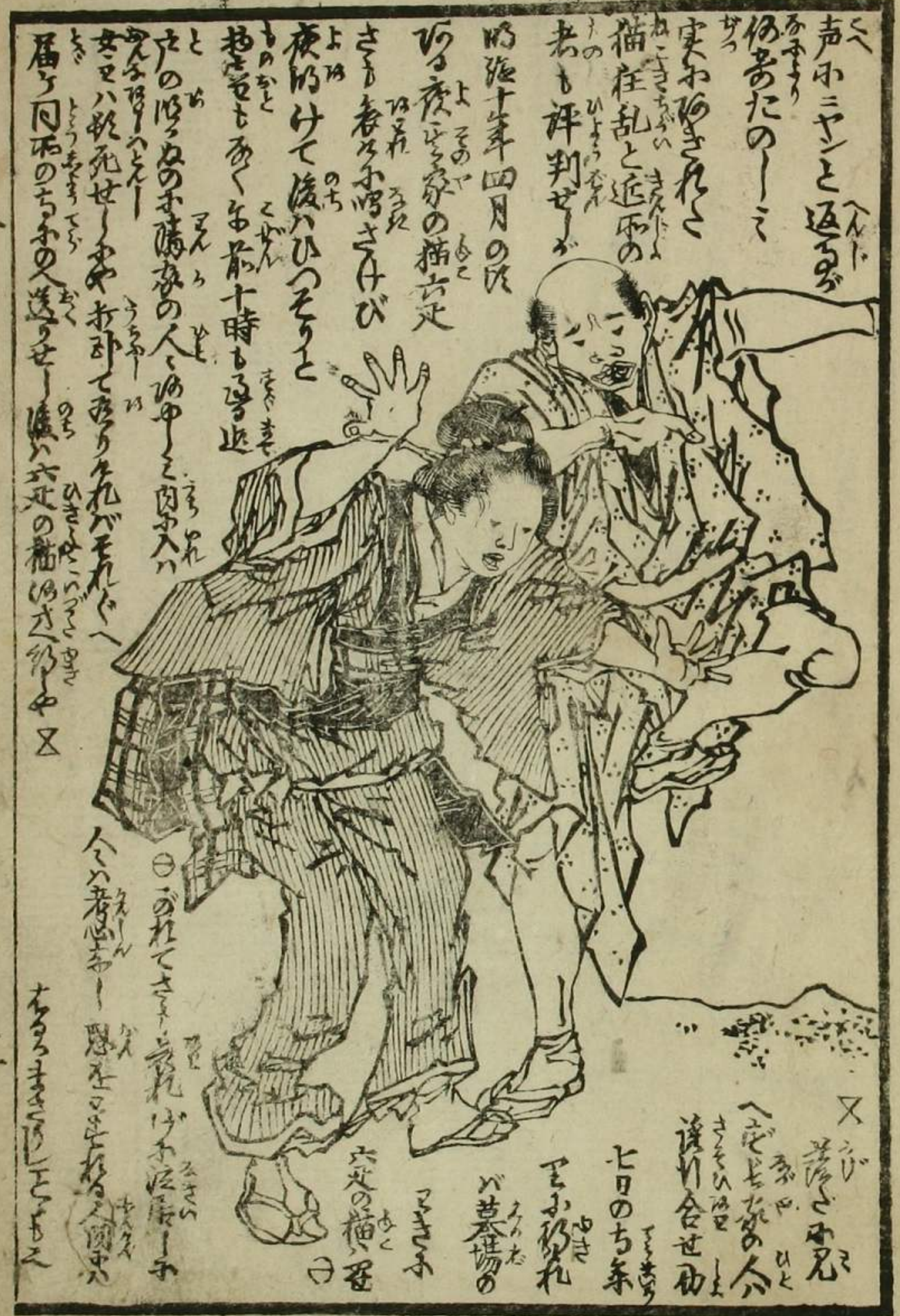
おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

おまへもあつたまを

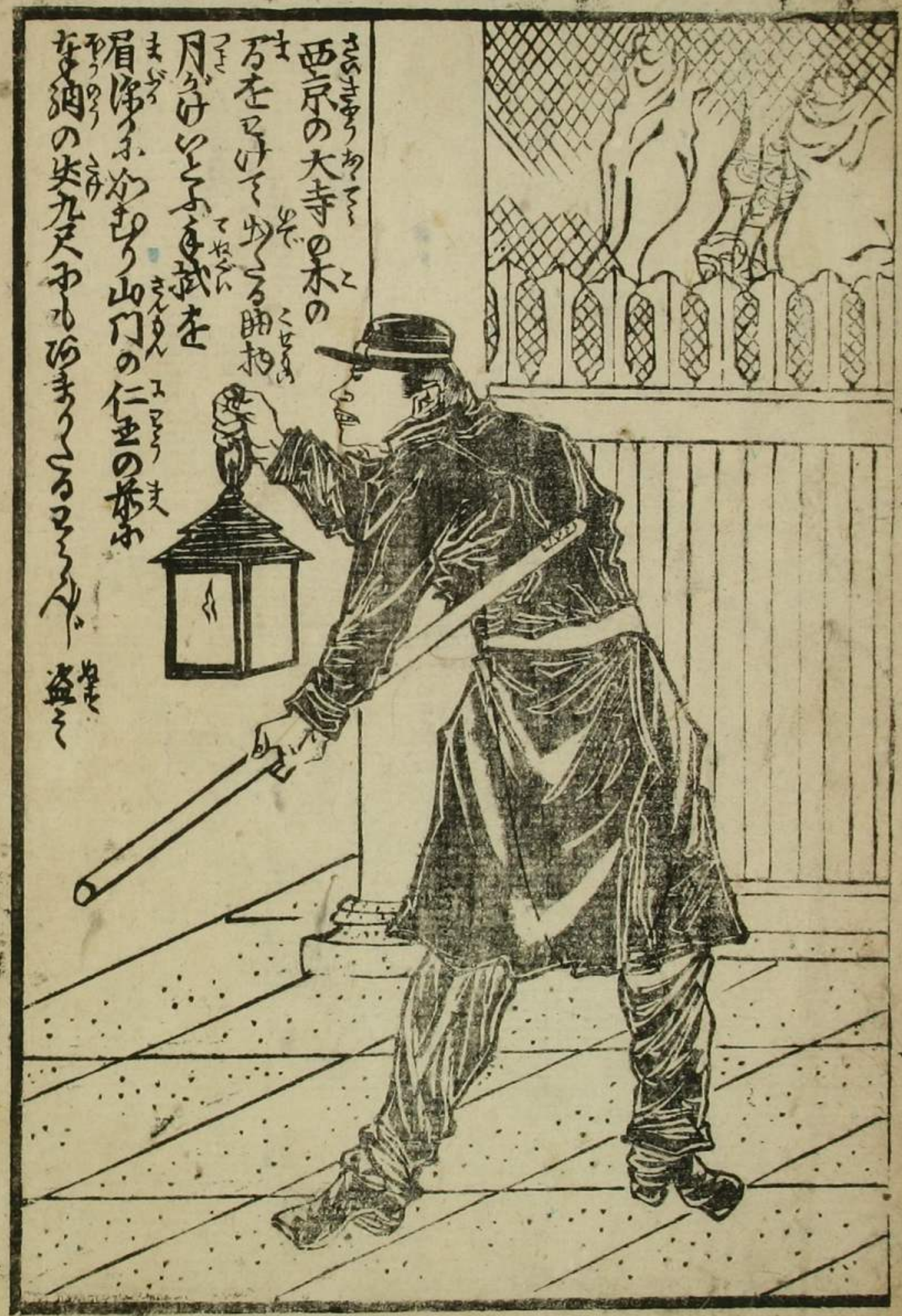


横濱を田丁小佐居赤尾女房之六
 さまーッ小こ子を貸小判小猫のつぎ
 と六正の猫を寄るゝとぞん出入の青やぶ日
 来ひらるるまき



声小ニヤンと返るが
 何あたのーミ
 実おあされと
 猫在乱と近所
 老も評判せが
 明治十年四月の夜
 何夜に家の猫六正
 さも春々おぼさひび
 夜のけて後ひひのそと
 掃きもあくる前十時も遅
 とのほらぬの赤藤の人のゆ甲と肉入の
 女は死せしおお即てありをれがそれと
 届す同所のちふの送るせし後六正の猫ゆせゆや

又
 落し小兄
 へん七な人
 渡り合せ初
 七日のち糸
 王お初れ
 昔茶場の
 六正の猫登
 日
 六正の猫登
 今人の考心お
 なるるまき



西京の大寺の木の
万をひけてゆくお相
月ひびくを裁を
眉清ふかむり山門の仁王の
を酒の炎九尺おひまうるる



芳春筆

跡先おんをなぐぬきぬ
曲者侍との大言子ハット
私るひんう晩が盗人
先着し中近るおハロ
子中田たりまきと
それゆへにゆいしを
まうこととまきと
朋方人巡査六南
きしとせと行とま
はがるぞた口
むとまふれと志根
されりと六世もた

明治十年
八月十四日
御届

本所外三町五番地
鎌倉 羽田富治
鎌倉馬道三番地
出巻人 兒玉弥七